平成二十五年五月一日 発行
昭和二十二年一月二十四日（第三種郵便物認可）
明治二十八年創刊 毎月一日・十五日発行

Good News for Japan ときのこえ

愛による関わりの大切さ

吉田かほる

お母さんが、子どもに微笑み話しかけている場面や、お父さんも一緒に子どもをいとおしんでいる様子、また子どもの笑顔に出会うと、幸せな気分になります。しかし、この親子のコミュニケーションが十分にできていない家庭が多くあるのでは、と思います。

その原因の一つとして、家庭の中でのコンピューター（パソコンや携帯電話、スマートフォンなど）の影響を痛感します。子どもが（時には大人も）ゲームやチャットに夢中になっていると、家族との会話が少なくなります。その結果、機械の画面とは話せても、自分の思いを言葉で表現することを学習できないまま大人になってしまう、顔と顔を合わせて話すのが苦手になる、また、傷つくことを恐れて人との付き合いを面倒と思う、そのような青年が増えているように感じます。

社会の基盤であるはずの家庭で、本来、得られるべき温もり、培われるべき人との信頼感を得ることが成長の過程でいかに大切か、を考えさせられます。

救世軍では、子どもたちを健全に育てるための働き（保育園や児童養護施設、小隊〈教会にあたる〉の青少年活動）とともに、家庭の中で重要な役割を果たす女性に対するプログラムもおこなっています。

その一つに「ファミリーソング」という、お母さんと子ども（胎児を含め、赤ちゃんや幼児）のためのプログラムがあります。歌を歌いながら親と子ども、また子どもと関わる大人が、目と目を合わせ、肌と肌のぬくもりを感じ、ゆっくり向き合って、〈わたしは愛されている〉〈わたしは大切な存在なんだ〉と心から感じることができる時間を提供しています。

あるお母さんからの手紙です。

「私は、産後、人と関わること、話すことなどが、すごく苦痛になりました。自分との葛藤の日々の中、二歳の息子のために散歩に出かけ、目にしたのが『ファミリーソング』のポスターでした。私にとって外に出る一歩、人と接することのきっかけをつくってくれたのが、この『ファミリーソング』でした。この集まりは、自分を飾らずにいられる、居心地の良い所となりました。優しく迎えてくださった皆さんに感謝しています。」

このプログラムの目的は、子育てに不安やストレスを感じているお母さんに安心して心の重荷を下ろす場所を提供するとともに、子育てという自分に与えられた責任を喜んで負うことができるように、お手伝い（支援）することです。

イエス・キリストは言われます。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」（マタイによる福音書11章28節）

神の独り子イエス・キリストは、神様を認めず自分勝手に歩む私たちの罪を解決するために、身代わりとなって十字架に架かって死んでくださいました。そのことを認めて罪を悔い改め、神様を信じた人は、神の家族に加えられ、日々、神様の愛を感じて歩むことができるのです。

キリストはまた、続けて「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。……わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイによる福音書11章29、30節）とも言われました。心のよりどころ、休むべき場所を示してくださるだけでなく、負うべき荷を一人ではなく、キリストが共にいてその力を与えてくださるのです。

キリストとの出会いによって、一人でも多くの人が、家族や他の人と愛によって関わることができますように祈ります。

（救世軍士官〈伝道者〉）

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈インタビュー〉

他の子と比べない子育て

―神様は必要な助けを必ず与えてくださる―

児玉 恵さん

サッカーや空手に打ち込む元気な高校生・児玉誠弥君。しかし、彼は、出生時のトラブルで、将来、装具をつけなければ普通の生活はできない、と宣告された赤ちゃんでした。現在、自分の障がいを肯定し、夢に向かって努力を重ねる誠弥君とお母さん・児玉恵さんの、今日までの歩みをお伺いしました。

―誠弥君はどういう状態で生まれたのですか。

児玉　産道につかえて出てこれなかったんです。先生が私のお腹の上に乗って押し、吸引されてやっと出てきました。その時には呼吸が止まって危ない状態だったそうです。その後、私は処置のため麻酔をかけられたので、大変なことが起こったということだけは感じていました。でも、お医者さんも主人も、私がショックを受けるだろうと気遣って、何も言わなかったのです。

―異常に気づいたのはいつですか。

児玉　三、四カ月経った頃です。私は保育士をしていましたから、子どもの発達過程はよくわかります。誠弥を抱っこして、体がつっぱる、首のすわりが悪いことに〈おかしい〉と思ったんです。すぐ、病院に行きました。出産前に通っていた病院でしたが、そこで言われたことは、

「一歳になるまで様子を見ましょう」

でした。でも、様子を見ているうちに治療の機会を逃してしまう、今すぐできることを教えてほしい、と必死で頼みました。そして紹介されたリハビリ施設に通うようになりました。

―リハビリの効果は出ましたか。

児玉　いいえ。数カ月通いましたが、何が変わるわけでもなく、良くなるわけでもありませんでした。毎日、不安の中にいました。

そんな時、当時住んでいた東京・谷中で、救世軍の制服を着ている男の方を見たんです。そしたら、その方に父の姿が重なって見えました。

―お父様の姿が重なって見えた……？

児玉　はい。両親は静岡市にある救世軍清水小隊（教会にあたる）の信徒で、日曜日、父はいつも救世軍の制服を着て、礼拝を守っていました。私も生まれた時から日曜学校に連れられて行っていました。でも高校くらいから部活が忙しくなるに従ってだんだん足が遠のき、結婚して東京に行ってからは全く小隊からも信仰からも離れた生活になっていました。

それで、谷中でその制服姿の男の人を見た時、懐かしさを覚えたんです。そして、はっと気づきました。〈そうだ、私には、私を支えてくれるものがあるんだ！〉思わず、その人に

「どちらの小隊に行ってらっしゃるんですか」

と声をかけました。救世軍上野小隊の信徒で、奥様のお墓に行った帰りとのことでした。

次の日曜日、私は抱っこひもで誠弥を連れ、バスに乗って、上野小隊の礼拝に出席しました。

―久しぶりに小隊の礼拝に出て、いかがでしたか。

児玉　神様に自分を委ねることの安心感に包まれました。忘れていた思いでした。その後は、特別なことがない限り、日曜の礼拝に出る生活を続けました。その間、誠弥は神様から預かった子、神様は必ず必要な助けを与えてくださる、という確信を与えられました。

半年ほど経った頃、通っていた病院の先生が静岡の病院を紹介してくださいました。このまま東京でリハビリをしていても結局は足に装具をつけなければならないが、静岡にある病院なら歩けるようになるかもしれない、と。半信半疑でその病院に行きました。

―いかがでしたか？

児玉　びっくりしました。最初の診察が終わり、「はい、お母さん」と戻された時、誠弥の首がしっかりすわっていたんです。たった一回の治療で！　それはリハビリの療法で、ボイタ法というものでした。それからは、新幹線で静岡の病院に通うようになりました。

リハビリを受けるごとに誠弥はぐんぐん変わっていきました。寝返りもできるようになりました。そのリハビリの先生が、

「歩けるようにしてみせます。あせらずにやりましょう」

と言ってくださいました。どんなに心強かったことか。それで、誠弥が一歳三カ月の時、これからのことを考え、静岡に住むことにしました。

―誠弥君のためにお住まいまで変えたのですね。

児玉　はい。ほかの子どもと比べることはせず、誠弥だけを見て育てよう、誠弥のペースに合わせてやっていこう、と決心しました。聖書に、

「何事にも時があり　天の下の出来事にはすべて定められた時がある」（コヘレトの言葉3章1節）

という言葉があるんですが、神様がすべて導いてくださる、誠弥の成長も、神様が定めた時に一つずつ進んでいく、と信じました。

そしたら、焦るということがなくなりました。この子はまだこれができない、あれも不自由だと悩むことから、この子が興味をもつことは何だろう、何が好きなんだろう、と考えることに視点が変わったんです。できないことを無理強いせず、できることを伸ばしてやろうと。そしたら希望が見えてきました。また不思議なことに、誠弥のやる気も伸びていったんですね。私は、将来、誠弥が自立して生きていくために今何が必要か、何を身につけさせたらよいか、ということを常に考えて、何事も決めるようになりました。

―誠弥君の自立のため……具体的にはどのように？

児玉　小隊の信徒の方が園長をしていた保育園に入園しました。子どもは他の子どもたちと一緒にいることで、いろいろ刺激を受けますから。同年代の子はみな歩いているのに、誠弥はまだハイハイしかできませんでした。でも、先生たちが受け入れてくれたように、子どもたちも普通に誠弥と一緒に遊んでくれましたし、誠弥もみんなの後を這いながら元気について回って、楽しそうに過ごしていましたね。

三歳になって少人数のキリスト教の幼稚園に入れたのですが、リハビリの先生がおっしゃったとおり、入園式の時には歩けるようになっていました。そこの幼稚園で、誠弥はのびのびと遊び、神様のことを教わって過ごしました。

小学校は、幼稚園に通う車の中から誠弥が毎日見て「行きたい」と望んだ所にしました。中学は公立だったので、そこで障がいがあることで何か言われたり、辛い事もあったと思います。でもそれをはねのけるパワーが誠弥には蓄積されていました。

―明るいお子さんに育たれたんですね。

児玉　もともとポジティブシンキングなんです。小さい時からキリスト教保育の所や小隊で、愛され大事にされてきましたし、本人もそれを実感していたのだと思います。障がいを引け目に感じず、何事にも積極的に取り組んで過ごしていました。

それから、やり始めたことはあきらめないですね。中でも、サッカーと空手は今でも頑張っています。サッカーは小さい時から大好きで、中学ではサッカー部に入り、練習に汗を流していました。今は、パラリンピックのサッカー日本代表選手を目指してボールを蹴っています。CPサッカーの岐阜のクラブに属してあちこち遠征に行ったり、大人の人たちと合宿したり、もう、私よりはるかに行動範囲が広くなっているんです。

空手は、小学六年の時、テレビで古武術の業の一つを見て、誠弥がぜひ習いたいと言ったのです。それでいろいろ調べて、日本でも有名な空手のすごい先生にめぐり合うことができました。その道場に入門するために、夜七時～九時まで一週間毎日見学に通い、教えていただくことになりました。今では、障がい者の全日本空手大会で四年連続、準優勝するほどになりました。

障がい者の全日本空手大会で誠弥君と

―誠弥君の将来の希望は？

児玉　理学療法士になりたい、と言っています。ボイタ療法を小さい時から受けて歩けるようになりましたから、自分もその施術をして一人でも多くの障がいをもった子どもの役に立ちたい、と。高校入試では、面接の時そのことを話し、無事合格しました。

その高校の面接は〝自分を売り込む〟というものでしたが、学校説明会の時、先生が誠弥に、障がいがあることを売りにしたらいい、とおっしゃったんです。驚きました。障がいをハンディとしか思っていませんでしたから……、発想の転換です。誠弥が言いました、

「母さん、ぼく、障がいをもっていて良かったんだよ」

と。この言葉を聞いた時、今まで大変な思いをし、本人も辛いだろうと思っていたので、本当に肩の荷が下りた思いがしました。そして、〈この子は幸せな子なんだ！〉と思いました。

その高校は、いろいろな条件に合う所を探して決めました。週に一、二回リハビリに通う病院までの便の良い所、そのための早退や遅刻を認めてくれる所、あまり家と近すぎない所、一人ひとりの個性を認めてくれる所など、将来、誠弥が自分で生きていく準備ができる所を、選びました。今、学校で、カウンセリングやホームヘルパーなど将来役に立つ資格をとり、誠弥は苦労しながらも喜んで取り組んでいます。

―着々と将来の準備ができているのですね。

児玉　はい。今年、高三になり、私はやっと一息できる、という感じです。これまで無我夢中でやってきましたが、一歩引いて見られるようになったというか……。振り返ると、神様の力によってすべて整えられてきたんだな、と思います。

私は四年前からフルタイムで働くようになり、ちょうどその時、今の職場「えじり保育園」が静岡市から委託されて始まったので、最初から関わることができました。幸い、私の両親が近くにいますので、いつも誠弥のことを見守り、助けてくれて、本当にありがたいです。

―児玉さんの抱負と言うか、今の願いはどんなことですか。

児玉　そうですね。誠弥が信仰をもってくれたら、安心なのですが……。その〝時〟がくれば、必ず本人から求め、神様のもとに戻ってくる、と信じています。息子だけでなく、主人や私の弟にも同じ思いをもっています。私は、両親が救世軍の信徒で、家庭にキリストの愛が溢れ、穏やかで恵まれた生活ができたので、その信仰の継承ができたらいいな、と思っているのです。

私の好きな聖書の言葉に、

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい」（フィリピの信徒への手紙4章6節）

というのがあるのですが、一人であたふたせず、何事も神様に委ねるなら、神様は一番良い時に一番良い方法で応えてくださる、と信じています。

誠弥のこれからの人生、うまくいくことばかりではなく、大変なこともたくさんあると思います。でも、神様を信じて歩むなら、どんな時も安心していることができる、と信じています。

私は誠弥に、人生で経験する事で無駄なことは一つもない、とよく言うのですが、信仰をもってくれたら、それが本当のことだとわかると思います。

（清水小隊（教会）所属）

ご両親、誠弥君と

―キリトリ―

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

ご氏名

ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。

創立者　ウイリアム・ブース　大将　リンダ・ボンド（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　勝地　次郎（救世軍本営　東京都千代田区）　http://www.salvationarmy.or.jp　E-mail : webmaster@salvationarmy.or.jp

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

●海外の緊急救援・支援活動

アルゼンチン　4 月初め、首都ブエノスアイレス周辺で大雨による洪水が発生。57 人が死亡し、10 万戸以上の住宅が被害を受けました。近郊のラプラタ市では特に被害が大きく、死者のうち 51 人がその市民です。ヴィラ・エルヴィラ市の救世軍は、100 人に避難所を、また 200 人に食料を提供しました。さらに、寝具や 7 トンの食料と水を地域に配給しています。

インド　北東部アッサム州で昨年 7 月に起こった民族紛争のため、1 万の家族が難民キャンプで暮らしています。不自由な生活をしている人々に、毛布、洋服、防水布、衛生用品などを配布しています。また、インド北部では、厳しい寒さのため、150 人もの死者を出しました。救世軍は、モラダバード、バレイリー、デリーにいる最も劣悪な環境に置かれている人々 2500 人に、毛布、緊急食糧を提供しています。

モザンビーク　今年 1 月に起こった豪雨により南部のリンポポ川が氾濫（はんらん）。20 万人以上の人々が洪水の被害を受け、15 万人以上の人々が避難を余儀なくされています。救世軍の支援チームは、地元行政府や関係者との会見や現地調査をおこない、食料や日用品の配布、建築資材の調達などをおこなっています。また、これに加えて、子どもたちが戻ることができるように、学校へ必要な物品の支援をも予定しています。

●日本 ― 高齢者に対する新事業開始

今年 5 月、東京杉並区和田に、社会福祉法人救世軍社会事業団の事業として、特別養護老人ホーム「恵みの家」（ユニットケア型）が開設されます。これは、都有地活用による地域のインフラ整備事業の 1 つとして杉並区が特養の計画をし、事業者の公募で救世軍が選ばれて、開設に向かって準備が進められてきたものです。10 室の個室をもつ 8 個のユニットから形成される、80 人定員のホームです。隣接する療養型病床を中心としたブース記念病院、老人保健施設「グレイス」と連携し、地域における高齢者のケアが、さらに前進することとなります。

4 月 8 日には、新しい建物の落成式がおこなわれました。式典には、東京都や杉並区の関係者をはじめ、設計・建築施工関係者、そして救世軍関係者など、約 200 人が集い、建物の落成を喜び、新しい事業に対する期待を表しました。式典では、最後に司令官勝地次郎中将が詩編 23 編よりメッセージを取り次ぎ、参列した新しい施設の職員にとっても、その使命を再確認する時となりました。

テープカット

落成した特別養護老人ホーム「恵みの家」

母の日の由来

母の日は、アメリカのウエストバージニア州に住むアンナ・ジャービスという人が、日曜学校の教師だったお母さんの記念会をおこなったことがきっかけで、始まりました。

生前、アンナのお母さんは、聖書の「あなたの父母を敬え」（出エジプト記20章12節）ということを子どもたちに教え、お母さんに感謝の気持ちを表すことの大切さを語っていました。このことを心にとめていたアンナは、

「『母の日』をつくって、感謝の気持ちを表しましょう」

と言って、お母さんの好きだったカーネーションを集まった人々に配りました。この考えに賛同した人々が集まり、次の年、教会で第一回目の「母の日」礼拝をおこないました。これが国中に広まり、一九一四年、アメリカの議会で五月の第二日曜を「母の日」にすることが決まりました。

日本で一般に祝われるようになったのは、一九五〇年頃からと言われています。

社会鍋のご献金を感謝いたします！

昨年 12 月も、社会鍋募金にたくさんの方々からご協力をいただきました。心からの感謝とともに、結果をご報告いたします。

北海道地区	1,067,808
関東東北地区	958,267
東京・神奈川地区	13,578,949
東海道地区	596,378
関西四国地区	1,816,015
中国九州地区	1,281,700
合　計	19,299,117

（2013 年 3 月 31 日現在）

寄せられましたご献金は、救世軍がおこなう様々な支援活動に用いさせていただいております。

救世軍とは　The Salvation Army

プロテスタントのキリスト教会で、世界百二十六の国と地域で働きを進めています。

創立者はイギリスのメソジスト教会牧師だったウイリアム・ブース。一八六五年、ロンドンの貧しい人々、社会から顧みられない人々の物心両面からの救いを目指して、この働きを始めました。百四十八年経った今もその精神は変わらず、助けを必要としている人々のニーズに応えながら、神様の愛を伝えています。

日本での働きは、一八九五（明治28）年に始まりました。その当初から、刑を終えて出てきた人々の保護や職業訓練、災害被災者慰問、失業者のための職業斡旋（あっせん）、廃娼（はいしょう）運動の推進、結核療養所の設立、子どもの保護……などを積極的におこない、明治、大正、昭和初期の社会福祉史に、先駆者としてその足跡を残しました。

現在は、四十五の小隊（教会にあたる）と十一の分隊（伝道所にあたる）、二十の社会福祉施設、二つの病院（ホスピス併設）を通して働きを進めるとともに、街頭生活者支援や災害被災者慰問など様々な社会奉仕活動をおこなっています。

（取扱支部）
救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

▼発行日及び定価
発行日　毎月一日・十五日
▼定　価
一日号一部五〇円（〒六〇円）
十五日号一部六〇円（〒六〇円）
クリスマス特集号（十二月一日号）
一部一〇〇円（〒六八円）
一年分　一三七〇円＋郵送料七二八円
振替・〇〇一八〇―五―四四〇〇
発行兼印刷人　救世軍　代表者　勝地次郎
編集人　齋藤恵子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二ノ十七
電話　東京(03)三三七―〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　図書印刷株式会社

（この欄に通信文を書くと第三種扱いになりません）